



装丁・南伸坊

算があり未来には夢がある……と
言ったのはアホな本読み男なんだ
けど、現代はそうそう夢を持って
未来を語れないよね。でも小松崎
茂なら、夢のある未来を語って
くれる。いや、描いてくれる。メカ
ニックな絵でも未来図でも、いつ
も暖かく明るく、どこか懐かしい
彼の作品を見ていると、そう思い
たくなるんだなあ。根本圭助編
『バンドラの匣』（発行人類文化社
／発売桜桃書房二八〇〇円）はメ
ダル・バッジ・トロフィー制作の
老舗メーカーの依頼を受けて彼が
起こした原画の画集だ。僕が子供
の頃は、迫力があってリアルな格
好良い絵という意識しかなかった
んだけど、こりゃ違うね。モデル
が一番ステキに見えるアングルに
気を配るだけじゃなくて、その理
想の背景も丁寧に添えるセンス。
CGでは決して真似の出来ないリ
アルさなんだ。特に船を描く時の
波の美しさ、飛行機を描く時の空
の美しさに、美学を感じるなあ。

あ、元来おみくじは神様と人間と
の交信の手段なんだぞ。あの箱を
ガラガラ振って菜箸みたいな竹の
棒を一本取り出す行為は、聖なる
偶然なのである。中村公一「一番
大吉——おみくじのフォークロ
ア」（大修館書店一九〇〇円）は、
日頃面白半分にはひいておみく
じのルーツを探る本だ。当然元祖
は中国なわけ。くじで占う行為は
随分昔から信じられていて、まっ
わる伝説や逸話が一杯あるんだ。
皇帝のお嫁さんだつて占って決め
ちゃうんだもん。病気の時は薬の
処方もくじで決める。このシステ
ムは今でも台湾にはあるの。違う
病気の薬がおみくじで出ちゃうっ
ても、どうやら平気らしい。信じ
るものは救われるってやつかな
あ。我が国でも古事記の昔からあ
って、西行法師の記述にも残って
る。本家中国に負けず劣らず、世
継ぎをくじで決めたりしてんの。
ちょっとヤラセ臭いんだけどね。
巻末には国内のおみくじ巡りなん
かもあって、ちょっとそそられて
しまった。やばいなあ。

この原稿の締切案内が、初めて
メールで来たんだ。しかも2通、
しかも翌日に確認の電話まであっ
て、これはメールを信用してない
のか僕を信用してないのか、そこ
んとことを確認しなくちゃいかん
と思いつつ書いている。枝川公一

『Eメールのある暮らし』（出窓
社一五二四円）は、インターネット
トやメールに関する事件や問題を
挟みながら、自身のメール生活を
綴った、デジタル人間じゃない人
のデジタル日記なんだ。日々顔を
合わせずに仕事をし、声を聞か
ずに友人と待ち合わせをする様子
に、手書き文字より
面倒が無く、電話より気兼ねがい
らない。メールはカジュアルな
けじゃなくて、僕みたいに小心者
で無精な人間に向いている伝達手
段なんだねえ。そして思わず唸る
ような問題も、ボンと提示する。
個人的なメールも全てチェックさ
れているアメリカの恐怖は殆ど小
説みたいだけど、考えたら郵便や
ファックスよりずっと管理しやす
い道具なのかも知れないなあ。メ
ールの洪水に揉まれ、パソコンの
ご機嫌を伺いながらあれこれ考え
ている著者の姿が妙に微笑まし
い。でもこの人、しょっちゅう酪
酐状態なんだよね。
メールの仕組みに頭を抱えたま

新刊めったくたガイド



装丁・熊沢正人

アナログ人間のデジタル日記
『Eメールのある暮らし』に◎
＝高野ひろし

将来と未来は違う、将来には打
算があり未来には夢がある……と
言ったのはアホな本読み男なんだ
けど、現代はそうそう夢を持って
未来を語れないよね。でも小松崎
茂なら、夢のある未来を語って
くれる。いや、描いてくれる。メカ
ニックな絵でも未来図でも、いつ
も暖かく明るく、どこか懐かしい
彼の作品を見ていると、そう思い
たくなるんだなあ。根本圭助編
『バンドラの匣』（発行人類文化社
／発売桜桃書房二八〇〇円）はメ
ダル・バッジ・トロフィー制作の
老舗メーカーの依頼を受けて彼が
起こした原画の画集だ。僕が子供
の頃は、迫力があってリアルな格
好良い絵という意識しかなかった
んだけど、こりゃ違うね。モデル
が一番ステキに見えるアングルに
気を配るだけじゃなくて、その理
想の背景も丁寧に添えるセンス。
CGでは決して真似の出来ないリ
アルさなんだ。特に船を描く時の
波の美しさ、飛行機を描く時の空
の美しさに、美学を感じるなあ。

そして1999年、84歳の小松崎
が仕上げた空母・赤城の見事なこ
とといったら！彼の様式美とさ
え言えそうな作品を更に増幅する
のが、かの筆記体によるサイン。
この画集には、描くことが好きで
好きで仕方がない気持ち、齢を重
ねても描ける欲があるぞ。
第1次大戦後のバリからアメリ
カに飛び火し、当時の美術界の古
典と前衛が合体して完成したアー
ルドゥコ様式。僕は詳しくないんだ
けど、整頓されたアールヌーボー
ってな趣も感じられるよね。その
波が我が日本にも押し寄せていた

時代があったんだ。末續堯『日本
のアールデコ』（里文出版三四〇
〇円）にちりばめられた多くのコ
レクション写真は、見ているとほれ
ぼれしちゃう。大正・昭和にかけ

て、こんなにアールデコの洗礼を
受けた製品が作られていたとは知
らなかつた。というよりも、単に
ただ古めかしいとかアンティーク
っぽいと勝手に判断していた物達
が、実は立派にバックボーンを持
っている物だったって、再発見出
来たということかな？当初はや
はり輸出向け商品に採用されてい
たデザインなんだけど、それが次
第に国内市場にも受け入れられて
いったんだ。食器やファッショ
ンだけでなく、オモチャや文具、本
の装幀から車、そして建造物ま
で、アールデコは身近なデザイン
として取り入れられた。和陶器や
着物の柄までアールデコだったん
だよ。著者はあらゆるジャンルの
コレクションを解説することでジ
ャパニーズアールデコの素晴らし
さを伝え、既に始まっている海外
流出に警告を発しているんだ。海
外の真似から始まって独自のスタ
イルを築いた意匠を一時代の文化
と捉え、もっと目を向けて欲しい
というメッセージが、この本には